



## じいじばあば萌え

主催団体 / じいじばあば萌え

### 【団体概要】

高齢者介護現場のマニュアル化が進むなか、利用者と職員の関係性がサービス一辺倒になる傾向がある。その元となる職員個々の視点、日常的に起こる出来事の捉え方などに、一種の“萌え”的な要素がある点に着目し、その大切さを掘り下げること、その伝達を考えること、を目的として、介護施設職員、福祉職員、高齢者と同居する個人などで構成されるゆるやかな集まり。

### 【事業概要】

変則的な個々のスケジュールや、立ち上げたばかりの団体であることを考慮し、メンバー間で日常生活や職場、日々の暮らしで出会った出来事、記事、エピソードなどを交換し、ネット上での意見交換や議論を通じて、今後の実活動へ移行するための土台づくりをしている。

2013年は、現場のエピソードや考えを元にし、まちと融合させた高齢者介護施設の提案模型を、静岡文化芸術大学デザイン研究科と空間造形学科にて建築を学ぶ学生たちの協力を得て制作した。







「おじいちゃん、おばあちゃんってこんなにかわいいんだよ!」「うん、かわいいよね」  
 「こんなところもかわいい!」と高齢者に日常的に関わる人々が情報を共有する。  
 それが「じいじばあば萌え」と名付けられたゆるやかな集まりである。  
 いったい、彼らはおじいちゃん・おばあちゃんのどんなところに「萌え」ているのだろうか。  
 「じいじばあば萌え」を生み出すきっかけとなった人にお話をうかがった。

### —— どういうところに「萌え」るんですか？

入れ歯がないところはいいですねえ。口がうちわ形になっているのがたまらない。それで喋っているときはすごくかわいい。なにせ一生懸命なんです。絶対に開かない扉を開けようとしているときもかわいいし、すごくおもしろいつくり話をしてくれるところもかわいい。「巨大な蟹が村を襲った」というエピソードを話してくれるとか、お尻の穴は傘で開けたんだとか、どこから出たんだろうというお話をいっぱいしてくれます。おせんべいを割ってくれようとするんだけど、手で割れないので、歯で割ったのをくれたりとかします。満面の笑顔で! かわいいですね。家で同居している人は、おばあちゃんが一生懸命移動しているところとかも、いとおしくてたまらないといます。もう、いろいろ。ひとりひとり萌えるポイントは違います。ある男の子は、おじいちゃんのふわふわした二の腕が好きだって言っています。

共通の問題意識は、「おじいちゃん・おばあちゃんに接すること」と「介護という職業の現状」との乖離だった。身近に接することで生まれる「かわいいなあ」という感情が介護という仕事の中では行き場がないという現実。「感情」を素直に吐き出すことで、ひとつの小さな疑問が波紋となって広がっていく。

### —— ギャップを感じるというのはどういうところですか。

家族は面会に来るのが長くても2、3時間だとすれば、残りの20時間くらいを私たちが一緒に過ごしているわけです。かわいい顔をして、かわいい寝言を言っているおじいちゃん・おばあちゃんを家族は知らない。病状に関係ないことでも、面会に来たご家族に伝えたくてしょうがないんですね。



そういうことを家族に伝えると喜んでくださるんです。そのつながりがあればもっといいのに、もっとケアに活かしたいのって感じるんですね。

そういうときに「かわいい」という表現は患者様に対して使うべきじゃないとか言われると、「どうして? 人間なのになぜ?」と思うんです。「かわいい」とか「おもしろい」とかいうのは高齢者を幼稚化していると言われる。じゃあ、このかわいいと思った私の感情はどうしたらいいんだろう。同じ仕事なのに、子どもならかわいくて高齢者なら敬うべきというのはわからない。同世代の子がしたってかわいいものはかわいいだろうし。そこいらへんがしっくりこなくて……。人間としての動作を愛おしいと思ったり、かわいそうだと思うことが専門家として許されないというか……。

でもそう思うことと、専門的に分析するという思考は違うんですよ。「かわいそうに」と思うところと「では、どうしてあげればいいかな」と思う分析の能力は別の話だと思うんですけど、そう思うこと自体が禁止されてしまうというのが、納得いかないところなんですよ。

介護の現場ではマニュアル化が進み、サービス一辺倒になる傾向がある。「ホテル並み」のサービスを謳う施設も多い。たしかに高齢者に快適である環境をつくることは大切だ。だが、「ホテル的なサービス」というところに集約していくというのはどういうことなのだろうか。

### —— 「サービス業」で「マニュアル化」しているというのはどういうことなのでしょう。

「きのう」ではなく「さくじつ」と言いなさいとか。今、私がいる病棟は医療介護病床で、基本的に70歳以上くらいの方々です。末期ガンの方もいらっしゃいますけれど、どちらかというと認知症ですね。おうちではもう看られなくなって、ご家族の方がちょっと辛い、という感じで入床されます。そのまま終の住処になる方も多いのですけれども、例えば立ち上がって歩き回りたい人がいても、歩くと危険だから何をするわけでもないのに「座っててください」。立ち上がろうとすると「座っててください」。何度も立ち上がろうとすると、「椅子の座り心地が悪いんじゃないか」って、座っていて快適な空間をつくらうとする。「音楽を流しましょう」とか「少し



お薬を使って眠くなるようにしましょう」とか。でもやっぱり本人は立ち上がりたいたから立ち上がっているんだと私は思うんです。ごはんを食べたくない人もいます。脱水症状になるといけないから、食べてもらったり点滴をします。でも本人の気分であえて満たさないのかもしれない。危険を排除するサービス業ですね。

—— 危険回避を優先するあまり、患者さんとのコミュニケーションが制限されてしまっているのではないか、ということ現場から感じられているんですね。

たぶん、保育園とかもそうなんだろうと思うんですね。一番に優先されるのは「家族の思い」というところが強いんです。小さい子どもや認知症の方は、自分自身の決定権が弱いんです。決定する力が本人にない分、家族が決定権を出すにあたって、介護士が患者さんにしてあげたいことの中に、必ず家族という、本人ではない人が介入してくるので、難しさも増すんですね。

—— その難しさというのはどういうことですか。

人の尊厳というのは大切です。認知症を煩った人は、本人も知らない領域が出てきているんですね。あるがままでいてもらうしかない。なぜウンチを触ってしまうのか、本人もわからないんです。ウンチをしたくて気持ち悪いからかもしれない。もちろんきれいにしますが、「そういう部分も含めて、この人なんだ」という解釈をしたときに、どこまでこの人を愛せるかだと思います。家族でも怒る人もいます。でも、怒る人は笑いに変わる人も多いです。

本当に本人が望んでいることなんて、誰もわからないんです。私たちも、家族も、先生も結局はわからなくて、わからないなかでも、知恵を振り絞って、こうしてあげたらいいんじゃないかな、っていうことを私たちも一生懸命伝えたいんです。



もちろん、家族にとっては、自分の両親や祖父母が認知症で煩った姿を見たくないという人もいるだろう。果たして第三者が「かわいい」と思えることを、家族も同じように思えるのだろうかという疑問を持つ人もいるだろう。だが、彼らは家族ならではの肉親に対する思いと、第三者の思いをつなげていくことが大事なのではないかと考えているのである。

「じいじばあば萌え」でもうひとつ重要なのは、介護従事者たちが、非公式にでも情報を交換しあうことで、よりよい介護のためのゆるやかな症例交換にもなっているということだ。

—— 情報をオープンにするということの利点は、  
どういふことでしょうか。

老人施設は終の住処だから、ひとつの症例がすごく長い。いま最高齢で102歳の方がいます。3食きちんと食べていて、もう10年以上施設にいらっしやるんです。介護施設は、通所の人もいれば、入所の人もいます。患者さんのプライバシーがあって、情報をオープンにできないので、他の施設なら同じ症例があったかもしれないけれども、ある問題が出てきたときに、似た症状の人がいるかというといないんです。だからみんな頭を悩ませる。もっとオープンだったら知っていたかもしれないことがわからないことも多いんです。だけれども、それぞれ人生が違う。個性も違いますから、こんなおじいちゃん、おばあちゃんという情報がないと伝えられないんですね。

彼らが雑誌で見て感激した介護施設がオランダにあるのだという。アムステルダム郊外に2009年にオープンした「ホーゲヴェイ (Hogewey)」である。この施設が他の老人ホームと大きく異なるのは、スーパーやカフェ、美容室などが用意された村のようなつくりであること。塀に囲まれてはいるが、その中であれば患者は自由に出歩くことができる。住む部屋もそれぞれの好みやライフスタイルに合わせて選ぶことができる。入居者たちは互いの部屋を往来することもでき、外(といっても施設内)に買い物に行くこともでき、迷子になっても介護士が家まで連れて帰ってくれるし、スーパーでは財布を忘れても通してもらえ。商品を



持ち帰ってしまったとしても、とがめられることはない。介護スタッフがちゃんと返しに行ってくれるからだ。認知症でも自分でできることはやる。できないことはスタッフが手伝う。快適に感じてもらうための安全を確保した上で、入居者に普通の日常が提供されているのである。

### ——わあ、「ホーゲヴェイ」っていいですね！

いいですよね！こんなことができるんだ！と思いました。こういう場所がつくれたらいいなあ、と思います。転んでもOKだろうし、病院の中だけでも、病院に行きたくなったら行く。外で座っているだけでもいいですね。こんな村のような施設があったら、本当にいいですよね！

……というふうには話は盛り上がり、「じゃあ、理想の施設をつくって展示しようよ！」ということになり、彼女たちの現場のエピソードや考えを元に、「こんなふうにはできたらいいね」を何度も対話を重ねて、まちと融合させた高齢者介護施設模型が出来上がった。浜松某所を想定してかたちにしたのは、静岡文化芸術大学デザイン研究科と空間造形学科で建築を学ぶ学生たちである。

高齢者介護には根深い問題が横たわっている。高齢社会を迎えたいま、さまざまな試みはまだ始まったばかりだ。だから現時点では介護に正解はない。「こうしたほうがいいんじゃないかな？」の積み重ねこそが、未来の介護につながっていく。非公式であろうが、彼らが話していることは現場の真実であり、現場の愛情である。「じいじばあば萌え」のような市井のやりとりが、これからの介護の現場で生きていくことになるととても嬉しい。(Sh)

